

奈良県立万葉文化館蔵

「尼崎本万葉集断簡(尼崎切)」 解題

大谷 歩

【書誌情報】

(管理番号…イ6)

〔書写年代〕 平安時代末期～鎌倉初期

〔体裁〕 軸装

〔行数〕 七行

〔寸法〕 本紙 縦二五・三 cm 横一四・三 cm

軸全長 縦一三六・五 cm 横三七・八 cm

〔字高〕 二二・五 cm

〔料紙〕 雲母引きの斐紙・無卦

〔収録歌〕 『万葉集』巻十二・二八九二番歌(訓のみ) から

二八九三番歌(訓の第四句途中まで)

〔その他〕 極札ナシ。箱裏「巻十二／あらたまのとしのをなかく」 「浪華法眼堺堂鑿」の墨書、朱の角印あり。

【解説】

「尼崎本万葉集」は、現在巻十六の一冊と巻十二の断簡が知られ

ている。書写伝来は不明で、当館の軸の外題には「源俊頼朝臣 尼崎切 月新所蔵」とあるが、現在は懐疑的な見方が多い。巻十六と巻十二は書写者を異にするが、料紙、寸法等の形式により同本と認定されている。非仙覚本系の本文を有しており、特に巻十六においては唯一の非仙覚本系諸本として貴重である。当館所蔵の「尼崎切」は巻十二の断簡のうちの一葉であり、『校本万葉集』諸本輯影(第六十七)に掲載されている。

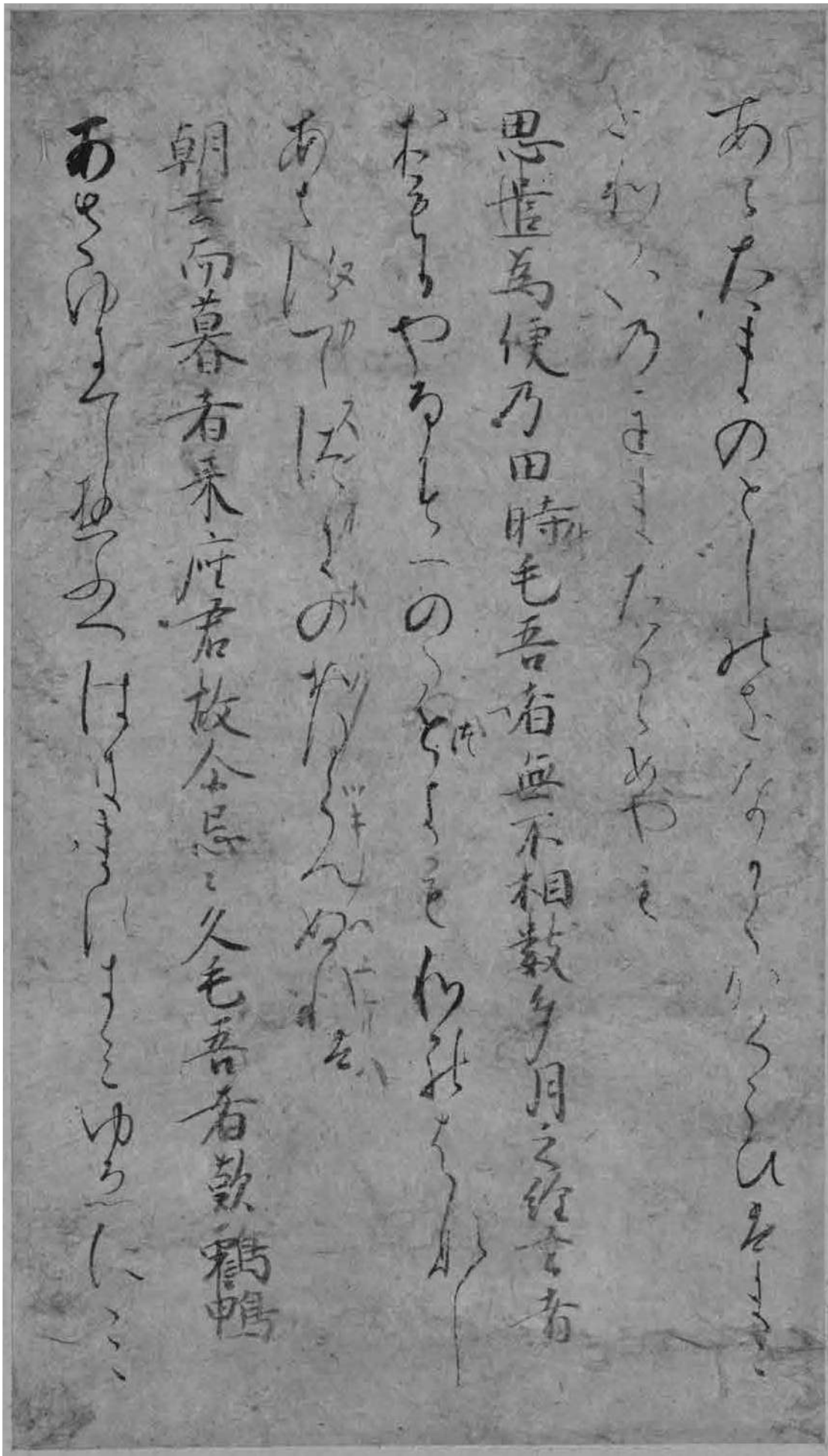
「尼崎本」(巻十六)には墨と朱による書入があり、校異・異訓が示される。この朱の書入について、『校本万葉集』は本文とは別筆であろうとするが、澤瀉久孝氏は同筆か、とする。当館所蔵の「尼崎切」にも墨・朱による書入が存するも、同筆・別筆いずれか不明である。当館所蔵の「尼崎切」は、漢字本文と同じ高さで別提訓が記されている。漢字本文は諸本と異同はない。訓においては、四・五行目の二八九二番歌に注目したい。「つきのおほくへぬれは」は、諸本には「あまたつきのへゆけは」とあり、独自の訓である。右傍の朱筆「ツキノヘユケハ」は諸本のいずれかの訓読を書入したものである。また同行の右傍の朱筆「ヌカスオホク」は元暦校本の右傍緒筆と一致し、「(あは)ヌカス」は西本願寺本・細井本の本文訓と一致、「オホク」は西本願寺本の右傍書とも一致する。朱筆の書入には諸本との校合の形跡がみられるが、当館所蔵の一葉の本文訓は仙覚本系統とは異なる系統に属するものと認められる。

注

- ① 『校本万葉集』第十七卷・諸本輯影（一九三二年、岩波書店）
- ② 『校本万葉集』第十卷・増補（一九三二年、岩波書店）
- ③ 澤瀉久孝「尼崎本万葉集に就いて」『万葉の作品と時代』（一九四一年、岩波書店）

【翻刻】

あらたまのとしのをなかくかくこひはまこ
 とわかいのちまたからめやも
 思遣為便乃田時毛吾者無不相数多月之経去者
 おもひやるすへのたときもわれはなし
 あはすてつきのおほくへぬれは
 朝去而暮者来座君故余忌々久毛吾者歎鶴鴨
 あさゆきてゆふへはきますすきみゆゑにこゝ



「尼崎本万葉集断簡」 奈良県立万葉文化館所蔵（本紙・原寸）